

CHRISTIAN CLASSICS
NO. 5

NOTES ON NUMBERS
BY C. H. M.

民
數
記
講
義

クリスチャン古典シリーズ第五集

C・H・マッキントシ著

山岸 登訳

民
数
記
講
義

NOTES ON NUMBERS

BY C. H. MACKINTOSH

C・H・Mについて

この頭文字は世界中のクリスチャンの間で知られています。それは、チャールス・ヘンリ・マックイントシの略です。彼は千八百二十年にイギリスのウイクロウのグレナルマー・バランクスで、スコットランド北部軍隊の大尉を父として、アイルランドの名家であるウイルドン家の娘を母として生まれました。彼は十八歳のとき、大きな靈的变化を体験し、初めリマリック市で実業界にはいりました。後に、同市で学校を設立しましたが、それを千八百五十三年に閉じました。彼はダブリン市に居住しながら、千八百五十九年に起きたリバイバルでは非常に重要な働きをしました。モーセの五書の講義やその他の小論は、最初、「新しいものと古いもの」という月刊誌に発表されました。彼は自分の著作からは、決して収入を得ようとはしませんでした。彼は休まない働きの後に、千八百九十三年に「キリストとともにいる」ために世を去りました。彼の遺体はチェルテンハム墓地に眠っています。この著書の中でも、彼の他の著書の中と同様、「彼の行ないは彼について行く」ことがはっきりしています。

目次

序	文	七
第一、第二章	一三
第三、第四章	四七
第五章	一九
第六章	一四
第七章	一七七
第八章	一八四
第九章	一九七
第十章	三三七

第十一章	二四二
第十二章	二七〇
第十三章	二七八
第十四章	二九〇
第十五章	三三三
第十六章	三四六
第十七、第十八章	三七二
第十九章	四二六
第二十章	四六〇
第二十一章	四七一
第二十二、第二十四章	四八一
第二十五章	五〇二
第二十六章	五〇五

第二十七章·····	五二〇
第二十八、第二十九章·····	五三三
第三十章·····	五三一
第三十一章·····	五三六
第三十二章·····	五四〇
第三十三、第三十四章·····	五四八
第三十五章·····	五五二

序文

校正刷を読み終えてから私は、今、この序文を書く心の備えができました。この序文を書くに当たり、私はこの書を賛美するつもりはありません。ただ私は、この著名な著者の働きに賛同の意を表したいのです。この書の価値は、この書自体が証明しています。読者はご自分でそれを判断してください。

著者と十二年間、月刊誌「新しいものと古いもの」を共同編集してきた私が、この講義の出版にあたって、相互の緊密な愛をもって協力を惜しまなかつたことは、誰もが認めることと思います。このことがなければ、私がこの序文を書く理由はありません。

すでに出版された先の三つの講義のすばらしい販売部数と第四番目の講義の出版への、各方面からの要請は、この書もまた、多くの人々によって講読されることを約束しています。

さて、民数記の性格について、少しばかり考えてみましょう。そのことの詳しい説明は、この講義の中に記されています。

民数記は、幕屋が建てられた後、宿営の最初の移動から始まった三十八年と二か月の間の、荒野

でのイスラエルの民の放浪についての神の歴史書と見なされます。そしてまた、つぶやき、言い逆らう民への神のご忍耐、やさしさ、疲れを知らぬご配慮についての永遠の記録簿とも見なされます。それは特に、荒野での書であり、荒野での旅、任務、波乱に満ちた彼らの行程が記されています。そのために、この書は、今日の悪の世の中にいるクリスチャンにとって非常に興味があり、最も重要な教訓に満ちており、非常に理解しやすく、直接自分に適用することができる真理に満ちています。民数記の第一章また第二十六章十三節と、申命記第一章三節とを比較してみてください。

民数記を読むとき、私たちの心を引きつける第一のことは、神がご自分の民を数えられ、彼らをご自分の回りに集められたということです。それは実に口では表現できぬほど、心に喜びと感謝を湧き上がらせてくれます。「その中にわたしが住む」と仰せられたとおり、神は宿営の真中に宿つてくださったのです。愛がこれ以上のことをする必要がありません。十二部族は主の幕屋を守り、レビ人たちは幕屋の回りに天幕を張っておりました。モーセ、アロンまた祭司たちは、主に近づく道の入り口を守っていました。イスラエルの宿営は、幕屋を中心として、すべて幕屋に向けて配置されており、その円周は少なくとも二十キロメートルはあったと言われています。しかし、荒野の中で、その宿営に一致と力と栄光を与えたのは、神の選民の中心である幕屋の

中に、主なる神が臨在されたことです。これこそ、来たるべきことの幸いな影、すなわち現在の教会の中心、いのち、また栄光でいますキリストの影です。

出エジプトから一年あまり経た後、主なる神はモーセに、二十歳以上で武器をとることができ民の数を数えよと命じられました。兵役が免除されているレビ部族は別に数えられました。ヨセフの部族がエフライムとマナセの二部族に分けられて、十二部族が作られました（第一―三章）。

すべてが在るべき場所に置かれ、雲が宿営を離れて動いたときも、とどまったときも、すべての者は、めいめい自分が何をなすべきであるかを知っていました。幕屋は建てられ、祭司は聖別され、民は数えられ、民は今やホレブを出発しようとしていました。「私たちの神、主は、ホレブで私たちに告げて仰せられた。「あなたがたはこの山に長くどどまっていた」（申命記一・6）。「第二年目の第二月の二十日に、雲があかしの幕屋の上から離れて上った。それでイスラエル人はシナイの荒野を出て旅立ったが、雲はパランの荒野でとどまった」（民数記一〇・11、12）。

日中は雲の柱が、夜は火の柱が宿営のすべての働きを導きました（民数記九・17―23）。幕屋から雲が離れると、ただちに銀のラッパが吹き鳴らされ、宿営全体が行動を開始しました。そしてモーセは祈りの声を上げました。「主よ。立ち上がってください。あなたの敵は散らされ、あなたを憎む者は、御前から逃げ去りますように」（民数記一〇・35）。そして雲がとどまった時、宿営全

体もとどまり、すべての者が自分の部署につきましました。そしてモーセが祈りました。「主よ。お帰りください。イスラエルの幾千万の民のもとに」(民数記一〇・36)。

この偉大な宿営が荒野の中を行進する様は、外部の者の目には実に堂々としたものに見えたことでしょう。バラムが「なんと美しいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は。イスラエルよ、あなたの住まいは」(民数記二四・5)と言ったのは当然です。しかし、この本当の美しさは信仰の目にも見えるのです。それは荒野にありましたが、世界で最も輝かしい一点であり、最も祝福された場所でした。ひとり残らずすべての者のために心をくばり、彼らの必要すべてを満たしてくださる神が、そこにご臨在されることは、何にもまして魅惑的に思えます。日ごとに主は彼らのために荒野の中に祝宴を設け、堅い岩から彼らのために水を出されました。旅する者の足はその四十年間、一度もはれたことはなく、彼らの着物もすり切れたことがありませんでした(申命記八・4)。

そこには、レビ人以外に、二十歳以上の男子だけで六十万人以上いました。女、子どもを加えたら、おそらく二百万人以上のことでしょう。しかし主なる神は、ちょうど父がわが子を自分の回りに集めるように、ご自分の回りに彼らを集め、夜も昼もご自分の雲のおおいで彼らをおおわれしました。「主は、雲を広げて仕切りの幕とし、夜には火を与えて照らされた」(詩篇一〇五・39)。このように神の家族の者たちは、安息と平安と祝福の中に守られていました。永遠の契約の血は、す